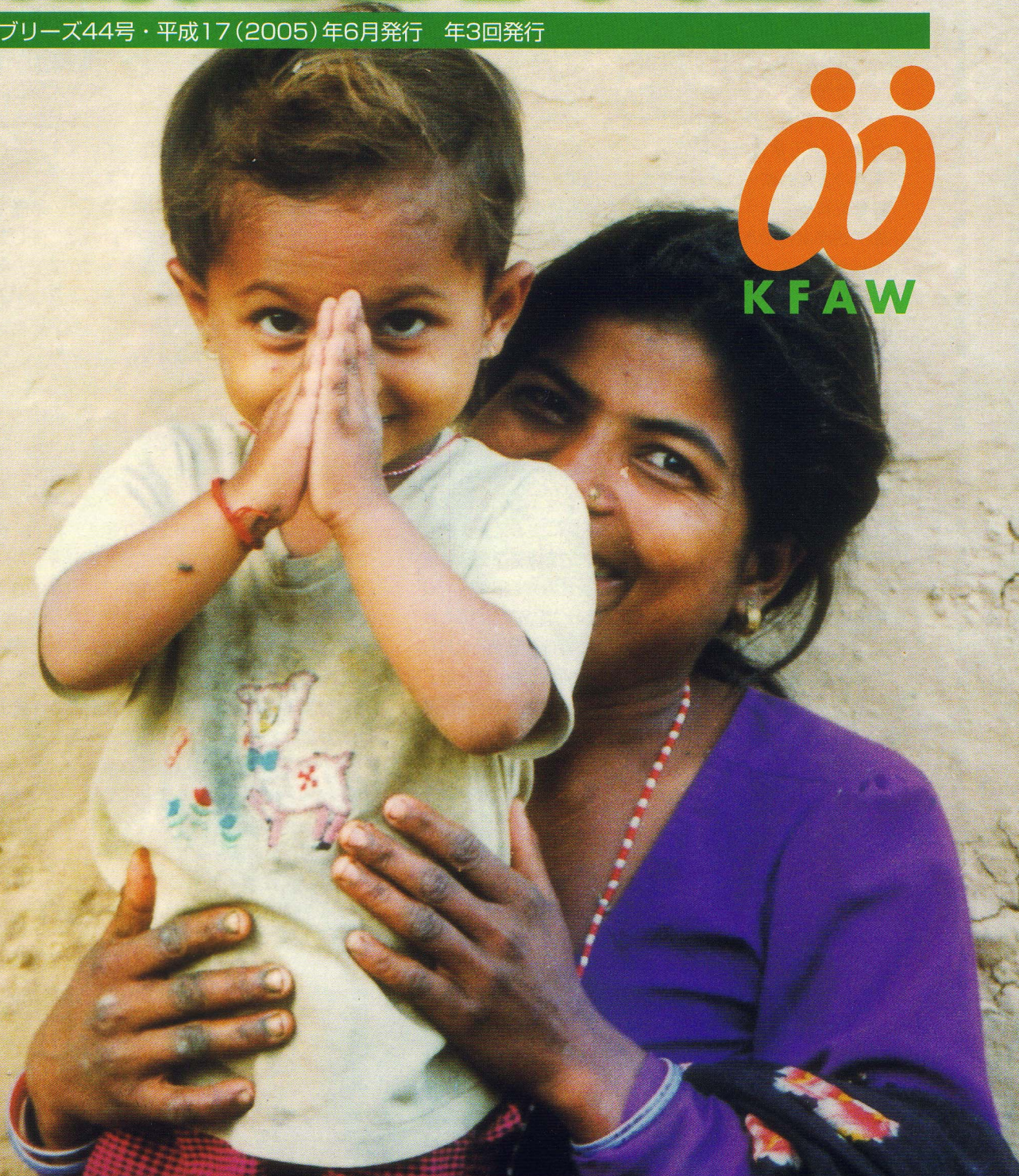
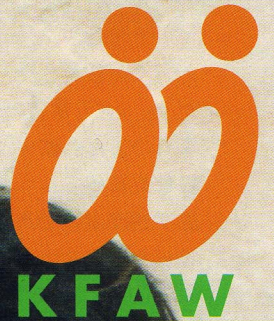


Asian Breeze

エイジアン・ブリーズ44号・平成17(2005)年6月発行 年3回発行



- | | | | |
|-------------------------------|---|----------------------|----|
| いま、女性たちは—WOMEN TODAY…… | 2 | 京都議定書発効記念講演会 | |
| 誌上セミナー | | 「地球温暖化対策の未来」…………… | 7 |
| 「グローバリゼーションをジェンダー視点からよむ」…… | 3 | 海外通信員レポート…………… | 8 |
| CSW49/「北京+10」世界閣僚級会合に参加して… | 4 | 第15期海外通信員を紹介します…………… | 10 |
| 国連防災世界会議 | | フォーラムの窓 | |
| 「ジェンダー・バランスの取れた防災文化の構築に向けて」…… | 6 | インフォメーション…………… | 12 |

NO. **44**
JUNE 2005

「女性にやさしいまちづくり」に向けて



Mari Christine

アジアの女性と子どもネットワーク (AWC) 代表
国連ハビタット親善大使

マリ・クリスティーン

2004年12月26日に発生したマグニチュード9.0のスマトラ沖地震/インド洋津波は十数カ国で100万人以上の方々が被災され、観測史上未曾有の被害をもたらしました。もっとも被害の大きかったインドネシアでは20万人以上の方が被害にあわれました。海岸の地域は壊滅的な打撃を被っており、出稼ぎなどのため人口400万人のうち約7割が女性であるアチェ州では多くの女性、子どもが犠牲になりました。住宅の破壊が著しく、家族、家屋、家財、仕事など一瞬に全てを失った人々は着の身着のまま避難しました。被害が大きかったインドネシアやスリランカはこれまで国内紛争が絶えなかった地域であるため、このような生活は彼らにとって初めてのものではなく、2度目、3度目のものであったことを考えると胸のふさがる思いがします。

今回のような大規模な地震による住環境の崩壊は、安全な飲料水の入手を困難にさせ、それによって健康が損なわれる可能性が高まります。ミルクの不足による栄養失調や乳幼児死亡率の増加、さらに、食料や支援物資が公平に渡らないといった問題が発生し、それらがすべて相まって貧困への悪循環をもたらします。このような状況は特に女性に大きな影響を与えます。働き手を失い母子家庭となり、将来への不安や心の傷を抱えた女性や孤児となった子どもたちへの緊急援助は大きな課題です。無秩序で法的保護のない状態では避難所におけるレイプや食べ物と引き換えの性的搾取、さらには人身売買の被害にあうというおぞましい状況さえ起きています。これらすべてのことを考慮にいれ、今後の復興のあり方を考えなくてはなりません。

私が親善大使を務める国連ハビタット(国際連合人間居住計画)では、「全ての人びとへの適切な住居」「都市化が進む世界における持続可能な人間居住開発」のために、水、衛生などの住環境整備や人間居住に関する問題について取り組んでいます。これらの人間居住問題は貧困撲滅、仕事の創出、女性と社会的弱者などへの配慮の必要性とも結びつけて考えなければなりません。

この観点から見ると、今回の復興支援はどのような状況で行われるのが適切なのでしょう。考えるべきことは山積しているものの、私は女性の視点を取り入れた復興「女性にやさしいまちづくり」を、その重要な柱の一つとして考えていくことが大切であると思います。

国連ハビタットが推進する「女性にやさしいまちづくり」とは、女性の視点を様々な社会問題や都市開発の政策に盛り込み、一人ひとりの市民にとって住みやすい地球社会をつくりだしていくことです。強制退去などの恐怖に怯え

ず、一定の土地や家屋に安心して住み続けることが出来るように、また、貧困層を含むすべての人びとがまちづくりに意欲的に参加し、住みやすい市民参加型のまちづくりができるようにすることを目指しています。そしてそれはコミュニティを通して実行されます。

具体的には女性を復興の担い手とし、最優先課題として夫を失った女性の住宅再建や家計の立て直しを行い、公平な物資の分配を行うこと。また、これまで夫名義であった土地や財産の所有権の証明が出来るようにすること、担保なしで借入れが可能な互助制度への支援を行うなど、さまざまな援助を実行する分配権、決定権を女性に与えることです。

元来女性は横断的な連携がうまく、政治的、宗教的縦割りを乗り越えることが得意です。女性の視点は生活者の視点であるからです。今回の復興支援に女性の視点を取り入れることは女性やコミュニティのエンパワメントとなり、それが長い間の国内紛争を乗り越え、和平構築への第一歩を踏み出すきっかけになることも十分考えられます。

エンパワメントとは、定義が難しいものですが、私自身は、女性が自分自身の存在を大切に思うセルフエスティームの意識を高め、搾取や抑圧から開放されていくことであると考えています。今回のような状況の中で、復興に女性が参加することは、結果として住みよい環境をつくるということだけでなく、その過程で、意見を表明し、自分を取り巻く環境を評価していくことがコミュニティの、そして女性のエンパワメントとなるのです。

スマトラ沖地震の復興が、女性や子どもといった社会的弱者に焦点をあて、よりよい住環境をつくり、さらに、その過程が女性や子どものエンパワメントにつながることを心より願い、これからも活動を続けて参りたいと思います。

マリ・クリスティーン Mari Christine

4歳まで日本で暮らし、その後ドイツ、アメリカ、イラン、タイ等諸外国で生活。帰国後、上智大学国際学部比較文化学科卒業。この頃芸能活動を始める。'94年東京工業大学大学院理工学研究科社会工学専攻修士課程修了。現在も都市工学を学んでいる。

生まれながらの環境から学んだ幅広い視点で、比較文化、都市計画・街づくり、女性問題、教育問題、人権問題について取り組んでいる。アジアの女性と子どもネットワーク(AWC)代表や国連ハビタット親善大使の国際的活動、講演活動、著作活動などを多数行っている。